

HBP Surgery Week2025 参加報告

Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeons “Challenges facing HBP surgeons in Korea and Japan: a contemporary crisis”

司会:

Jeong-Ik Park (University of Ulsan Hospital), 原 貴信(長崎大学)

発表者:

- **Results of Questionnaire Survey**

楊 知明(京都大学)

- **Next Generation Project in Japan**

冲永裕子(都立駒込病院)

- **Current Crisis in (HBP) Surgeons in Korea**

Yoon Bin Jung (Severance Hospital, Yonsei University)

- **Panel Discussion: Recruitment-Education**

Seok-Hwan Kim (Chungnam National University Hospital)

Yeongsoo Jo (Ewha Womans University Medical Center)

Boram Lee (Seoul National University Bundang Hospital)

Yoo Jin Choi (Korea University Anam Hospital)

石井範洋(群馬済生会前橋病院)

松尾泰子(奈良県立医科大学)

前川 彩(がん研有明病院)

梅澤早織(聖マリアンナ医科大学)

小齊侑希子(福岡東医療センター)

冲永裕子(都立駒込病院)

楊 知明(京都大学)

- **Closing Remarks**

江口 晋(長崎大学)

2025年3月27日から29日まで慶州で開催されたHBP Surgery Week2025にて、Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeonsのセッションに参加して参りました。慶州は新羅の王都として栄えた都市で、仏国寺や石窟庵といった世界遺産があります。会場近くには普門湖という大きな湖があり、そのほりではたくさんの桜の木が花開こうとしていました。歴史ある都市で、各国から招かれた多くのゲストと活発な議論が行われていました。

今回のテーマは” Challenges facing HBP surgeons in Korea and Japan: a contemporary crisis”ということで、外科医の減少が続く日韓両国において、肝胆膵外科医のリクルート、トレーニングの現状と改善策についての討論が中心となりました。会場には多くの先生が聴講に訪れており、注目度の高さを感じました。まず日本側より、Next Generation Project (NGP)ワーキンググループが 2022 年に実施し、JHBPS 誌上に公開したアンケート結果について楊先生より紹介がありました(<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/jhbp.12092>)。続いて、45 歳以下の会員からの要望をもとに開催した NGP セミナーにつき、沖永裕子先生より報告がありました。沖永先生はまた、若手のリクルートのために中学生、高校生、医学部生、研修医のそれぞれの段階に応じて外科に興味を持ってもらうための取り組みを行っていること、若手医師への教育方法が変化していること、女性肝胆膵外科医が昨今増加傾向にあることを紹介されました。

続いて韓国側より、昨今の韓国の外科医減少の状況とその原因についての発表がありました。政府の医学部定員増加政策を契機としたレジデントの大量辞職、医学部生の休学問題はまだ収束の気配を見せておらず、今年の医師国家試験受験者・合格者は例年の 10 分の 1 に満たない状況であったことが日本のニュースでも取り上げられていました。2025 年の外科修練希望者は韓国全土でなんと 6 人しかいないとのことで、想像以上に状況は深刻なようです。医療過誤が疑われた際の外科医の訴追率が高いこと、以前の合同セッションでも話題になりましたが、手術の診療報酬が日本の約 5 分の 1 程度に設定されていること、腹腔鏡と開腹で費用が変わらないこと、ロボット支援下肝胆膵外科手術がいずれも保険でカバーされていない(患者負担)ことなどもまだ変更はないようで、若手の外科離れの原因と考えられているようです。Jung 先生曰く、この状況は crisis ではない、これが現実なんですとのことでした。

ここからはパネリストの先生方に登壇いただき、以下の 3 つの問題を取り上げて討論を行いました。

① 認定医制度がリクルートや若手の教育に及ぼす影響

日本からは、資格を目指す若手にとって執刀機会が得られるようになった、トレーニングが均一化される、言語化により疾患や手術への理解を深めることができるといった意見が出ました。一方、デメリットとしては認定施設での修練しか認められていないため人事の問題など自分ではどうすることができない点がある、取得してもインセンティブが得られるわけではないといった意見が出ました。韓国からは、日本のように手術の技術を評価する制度に若手が魅力を感じるのではないか、制度の変更を考えてもいいのではないかという意見がありました。一方で取得の平均年齢が 40 歳を超えている日本の現状について、長すぎる、若手は敬遠してしまうのではないか、という懸念も聞かれました。

② ヒエラルキー型の指導体制が若手医師のリクルートに及ぼす潜在的な悪影響

日韓いずれのパネリストからも、ヒエラルキー型の組織について肯定的な意見がでました。チーム医療を行う上で必要、同様の指導体制は外科に限らず他業種でも見られる、患者さんへの安全性を考えた場合上級医の存在は不可欠、といったものです。そのような指導体制を旧態依然としたものにとらえる若手にとっては外科を避ける理由になるかもしれない、若手に執刀機会が回ってこない可能性があるとの懸念も聞かれましたが、認定制度により執刀機会が増加していたり、step by step での指導が有効であったりと、施設間で多少の差はあるものの以前とは状況が変わってきているようです。江口先生から、指導する側としてヒエラルキー型へのこだわりはないが、患者さんへの責任の所在をはっきりさせるという点では重要だと考えているとのコメントが有りました。

③ 韓国と日本の女性肝胆膵外科医が直面している現状と課題、男女の多様性を改善するための戦略

子育て中の沖永先生と小齊先生より、昔と比較して社会の出産や子育てに関するサポートが充実してきていること、女性に限らず男性も育休や子どもの学校行事などでの休暇を取りやすい環境になってきているのではないかと意見がありました。一方韓国側からは、女性肝胆膵外科医のほとんどが独身であること、理由として臨床業務に加えて研究や教育などやるべきことが多く、結婚や育児に割く時間がないとの意見がありました。日本では近年女性の肝胆膵外科医が増加傾向にあり、子育て中でも執刀や業務の継続ができる体制を作っている施設もあることから、今後も発信を続けていきたいと思えます。



最後に江口先生より、今回の特別企画、日韓交流の機会を作っていただいたことへのお礼と、今後の両国の肝胆膵外科の発展を祈念するお話がありました。その中で学生や若い医師の考え

や姿勢が変化してきている具体的なエピソードも紹介され、指導医側もアップデートしていかなければならないと強く感じました。

今後は日韓のコラボレーションとして手術に関するビデオカンファレンス、誌上対談などを進めていく予定です。また、第2回のNGPセミナーの準備も進んでおります。続報にご期待ください。

文責：原 貴信（長崎大学）